

M02a Solar-C 計画における運用体制構築と成果創出へ向けた最近の取り組み

鳥海 森, 清水敏文, 川手朋子, 松崎恵一, 鄭 祥子 (宇宙航空研究開発機構), 今田晋亮 (名古屋大学), 一本 潔, 永田伸一, 浅井 歩 (京都大学), 末松芳法, 原 弘久, 勝川行雄, 久保雅仁, 渡邊鉄哉 (国立天文台), 渡邊恭子 (防衛大学校), 横山央明 (東京大学), ほか Solar-C ワーキンググループ

次期太陽観測衛星 Solar-C (EUVST) は、2020 年 4 月、JAXA 宇宙科学研究所により公募型小型 4 号機として選定され、現在ミッション定義審査へ向けて検討が加速されている。本講演ではデータ利用・運用コンセプトを示すとともに、科学成果創出へ向けた最近の取り組みを紹介する。Solar-C の科学目標は (1) 太陽大気や太陽風を形成するメカニズムの理解と、(2) 大気が不安定化し太陽フレアを駆動する機構の理解である。EUVST 科学チームはこれらの目標を確実に達成するためコア観測プランを設定するとともに、世界の研究者から観測プロポーザルを受け付け、「コア観測」と「提案観測」のバランスを確保した運用を実施する。一部の「コア観測」で必須となる地上大型望遠鏡との協調観測を実現するため、NSO/DKIST の研究者と枠組み策定へ向けた協議を開始した。衛星によって取得されたデータは日本や各国の地上局を経由して宇宙科学研究所のテレメトリデータベース (SIRIUS) に集約され、データアーカイブシステム (DARTS) より配信される (原則として公開)。名古屋大学宇宙地球環境研究所に設置される Solar-C サイエンスセンターは、解析環境の提供とともに、観測データのキャリブレーション・地上観測データとのアラインメント・数値シミュレーションデータの提供などを予定している。EUVST 科学タスクチームは、このうち数値シミュレーションを含む理論と観測との連携を主眼に、2020 年 6 月から週 1 回セミナー形式で検討を開始した。以上に述べた進捗状況の紹介や各学会での報告など、最新情報の告知は、国立天文台 Solar-C ウェブページにおいて、科学目標や観測装置の解説とともに随時行われている。